氏名	橋本　大輔
ヨミガナ	ハシモト　ダイスケ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第642号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　美術教育における記号と実在
	〈作品〉　痕
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津　文哉
（論文第１副査）	上智大学	教授	（美術学部）	上野　正道
（作品第１副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	渡邉　五大
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤　典彦
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文は美術教育論における記号論と実在論の位置づけを考察することを通して、美術の学びを一つの知の在り方として位置づけることを主題としている。これは近年美術教育学において興隆してきているArts-Based Research（芸術的省察による研究：ABR）という動向について、その実践の史的・学問的位置づけを整理し、その可能性と課題点を批判的に検討するための理論的基盤を与える試みでもある。

ABRは、美術の探求を一つの知の在り方として、その営みを研究の一形態として認める考え方である。そのことの意義は、美術に関する理論と実践の関係を統一的な観点から捉えることを可能にすることである。これは、美術科教育と専門教育、美術の実践と思想的研究といったような領域が分断され個別に研究されるのではない在り方としての美術の研究を構想するための基礎理論となりうるものである。

そこで問題になっているのは、美術における知とは何かという問題である。現在、先行研究においてはそのような知が存在しているという前提でABRの探求が行われており、またABR研究に限らず美術の学びの意義を認める場合、何らかの知の存在が仮定されることが多い。しかし、その知は必ずしも明確化されていないものである。そのため、美術における知を明らかにしようとすることは、今日の美術教育学においても意義があるものと認められる。本論文は、知のあり方を規定してきた記号論と実在論の議論を渉猟し、美術制作者の観点から美術教育における知とは何かを原理的に考察したものとして独自性を持つ。

各章の構成については以下のとおりである。まず第一章では、美術教育学の今日的な問題状況を整理する。制度論的な研究を超えて、美術教育についての本質主義的な考察が求められている現在、質的革命の潮流においてABRが生じてきた。そのような背景に、本質主義―文脈主義といった対立構造があったことを示し、金子―柴田論争、DBAEとポストDBAEという議論の状況を踏まえたうえで、今日的な美術教育学の課題を明らかにする。

第二章では、美術教育においても重要な要素である作品制作についての理解を深めるために、リアリズム絵画制作を主題として美術制作の概念的モデルを提示する。美的記号という概念を導入し、美術制作におけるリアリズムを再帰的な意味の生成の場というシステムとして位置づける。

第三章では、記号論における記号の外部への志向性について論じる。記号論的美術観は記号外部の実在を捨象するという傾向があり、またそれに則った教育手法が形骸化する恐れがあるものであった。本章では、美術教育を考える際には記号と実在の中間領域としての美術のあり方を的確に把握する必要があることを示している。

第四章では、科学哲学における境界設定問題を主題としながら、美術教育における知のあり方について考察する。特に、美術の実践は学的妥当性があるのかという問題について考える。

第五章では、言語論的転回という20世紀の哲学的潮流についておさえ、美術の知と命題的知の概念の齟齬を踏まえて、美術における知を考えるためにはどのような理論的な前提が必要なのかを考察する。本章ではそれを美術的プラグマティズムの実践に求めている。

第六章では、近年の実在論の動向である「新しい実在論」の考え方を批判的に検討する。新しい実在論は相対主義を超えて記号の外部の実在の思考可能性を主張する。本論文では、新しい実在論の中でも人間的要素を重要視する「意味の場の存在論」に可能性を見出し、それを記号論的な立場と接続し、美術教育を考えることを試みる。

第七章では、政治としてのリアリズムという観点から美術教育を描写する。ランシエールの政治概念を参照して主体形成のリアリズムを考えたうえで、リードの「芸術による教育」と接続し、それをシモンドンの個体化論と合わせて考えることで、美的教育としての美術教育を位置づける。

第八章では、本論文全体の総括も含めて美術教育をフィクションによる教育という観点から考察する。本論文においてフィクションは美的教育のリアリズムを実践する際に再帰的に生じる、変容し続ける質的な同一性と非同一性の連関における出来事的存在として考えられている。そのようなフィクション概念を採用する論拠と利点を述べたうえで、従来フィクションが知の体系において相対的に弱い位置づけにあったということを指摘し、フィクションの可能性という観点からいくつかのフィクション的実践の擁護を試みる。フィクションによる教育は本質的な表象不可能性から出発して、記号と実在の質的な関係性からなるフィクションをつくり出すことで主体が生成するというリアリズムとしてとらえられる。この立場が本論文で示しえた美術教育の本質主義的な位置づけである。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、美術教育における記号論と実在論の対立構造に対して中立的な立場を採用する観点から、美術の学びを一つの知の在り方として捉え直すことを試みている。とりわけ、美術教育学において、近年、一つの潮流を形成しているArts-Based Research（芸術的省察に基づく研究：ABR）の可能性と課題を批判的に再検討している。著者によれば、記号論と実在論の問いは、一方の言語中心主義、文脈主義、形式主義と、他方の自然主義、科学主義、本質主義への問いとして、すなわち美術の実用性を強調し、子ども、地域社会、国家の要求を第一の要因として美術教育の役割を強調する文脈主義と、美術だけが提供できる人間の経験と理解への貢献を問う本質主義の立場として言い換えられる。これに対して、ABRは、美術教育の教科としての専門性を継承しつつ、それを質的知性に求める点に特徴があるとされる。本論文では、この課題をさらに、記号と記号の外部の問いへとつなぎ、言語論的転回以後の美術教育における知の位置づけとして、虚焦点としての美術の知性、新しい実在論、政治としての美術教育、フィクションによる教育が検討される。

本論文は、美術系大学における理論研究の位置づけと、美術の学びにおける知への問いを、ポストモダニズムや言語論的転回以後の美術教育における記号と実在の対立のどちらかに与することなく、美術教育における知性の理解を刷新しようとする点で高く評価できる。ポストヒューマンやポスト真実の時代とされ、人間の不在や主体の消滅が言われる中で、新たな「主体形成のリアリズム」を問い直し、それを思弁的実在論における人間の位置や、ランシエールの「政治と芸術は、知と同様に〈フィクション〉を構築する」という主張に結びつけ、最後に美術における知の考察にはフィクションの意義を擁護する必要があるとする点は、美術教育研究の新たな展開に寄与しうる本論文の独創的かつ画期的な貢献であると言える。今後の課題の一

つには、学校教育における美術の教科やカリキュラムに対する実践的示唆についても検討することがある。これらの点を踏まえ、本論文は、審査会において課程博士論文の水準に十分に達していると評価され、全員一致で合格とした。

（作品審査結果の要旨）

ここ数年橋本氏は廃墟をテーマとしたリアリズム絵画を制作している。彼の作品の大きな魅力は、徹底した精緻な写実描写により、鑑賞者に失われた時間や記憶の膨大な積層を感じさせることにある。本作は廃墟のように第一印象で鑑賞者を圧倒する劇的な風景ではない。初見ではむしろ湿潤温暖な日本の典型的な風景と感じられ、構図も対称的で穏やかな印象を感じるだろう。ただしその後、鑑賞者は「痕」と言う作品題名に違和感を感じ、再びこの大画面の前に佇むことになる。細部に目を凝らしていくと、心が少しずつ騒めいてくる感覚に囚われていく。

描かれている風景は旧足尾銅山と渡良瀬川である。日本の近代化における負の象徴となった足尾鉱毒事件の舞台であり、人間の業の記憶の集積地である。陽光を浴びている山肌と対岸の山影の対比、そして中央を流れる川の水面に山影がくっきりと映り込み、この穏やかに見えた左右対称の構図を逆に光と影の対比の強調として効果的に利用している。画面中央奥に禿山状態の尾根を見つけることができて痛々しい。さらに細部を追っていくと点在する採掘坑跡、落石防止用の柵、途中で途絶えている引き込み線跡等々、中景および遠景を克明に冷徹な眼差しで描写している。近景に着目すれば河原の石の一粒一粒の形や質感まで、まるで山から掘削された残石が流れてきたのかのように認識できるほどに感じられる。唯一生身の人間を感じるのは、河原に残されている作者の足跡のみ。これも多義的な意味を含んだ隠喩としても読み取ることができるだろう。またこの作品の重要な要素である印象的な青空。鮮やかな空に湧き上がる雲が人知を超えた崇高なものすら感じさせる。

自然主義的な写実風景画の美しさを纏いながら、実際には人間の愚かさや罪深さ、そして因果応報といった仏教的、哲学的な主題を訴えているという二律背反的な作品構造に、審査員全員の共感を持って評価され、博士号の取得に値するという全員の一致をもって合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請論文は、「美術教育における記号と実在」と題され、その中でＡＢＲ（Arts-Based Research)の可能性と課題を批判的に再検討している。著者が本学入学後に連続性をもって研究を重ねてきた、美術教育とは何か？美術教育の役割とは何か？といった問いを設け、それについて美術の実用性を強調し、子ども・地域社会・国家の要求を第一の要因として美術教育の役割を強調する文脈主義と、美術だけが提供できる人間の経験と理解への貢献を問う本質主義の立場として言い換えることが出来る、と記号論と実在論への問いの解、と位置付けている。

ABRは美術教育の強化としての専門性を継承しつつ、それを質的知性に求める点に特徴があるとし、本論文ではこの課題をさらに記号と記号外部の問いへと繋ぎ、言語論的展開以後の美術教育における「知」の位置づけとして虚焦点としての美術の知性、新しい実在論・政治としての美術教育、フィクションとしての教育について検討している。

筆者独特の感性として、美術・美術教育に関するあらゆる知識に対する渇望感、好奇心に満ち満ちた研究となり、それにとどまらない旺盛な探求心、理性による研究が実を結んだ論文となった。今後の課題の一つには、学校教育における美術の教科やカリキュラムに対する実践的示唆についても検討すること、がある。これらの点を踏まえ、本論文は審査会で課程博士論文の水準に十分に達していると評価され、全員一致で合

格とした。

博士審査展提出作品「痕」は複数のパネルを横並びに設置した中に描かれた、いわゆる「風景画」である。足尾銅山をモティーフに採った本作品で、作者は営利優先の高度成長期の残滓の一つである銅山に、自然主義・ポストヒューマニズム・絵画文脈の中での透層・インプリマトゥーラ、といった様々な要素を盛り込み、絵画作品として鑑賞に耐えうる作品として仕上げている。彼本来の興味の出発点である「写実」というものに強い共感と疑念を持ちつつ制作研究を重ねている様が見え隠れし、興味深い。

自然主義礼賛と相反する生きて行かねばならない人間社会・そこから生まれるﾎﾟｽﾄヒューマニスム、因果応報、など自然環境的な課題や哲学的な主題が見え隠れする作品構造などが審査に当たった教員全員の共感をもって評価され、博士号の取得に値する、という全員一致をもって合格とした。